

# いけばなの歴史

水江漣子

## History of the flower arrangement in Japan

Renko Mizue

### 1. いけばなの歴史

日本人の生活文化のひとつに、いけばながあることはいうまでもない。いつごろからいけばなは、日本人の生活とつながりをもつようになったのであろうか。いけばなの過去(歴史)は、どのようになっているのであろうか。

いけばなにも歴史があるなど、思ってもみなかったという人は、意外に多い。歴史があると思わなかったとは、どういうことか。いけばなには、変化や発展はみられず、はじめからできあがった型や方式が、そのまま今日までつづいてきたというのであろうか。

いけばなには歴史がある。過去がある。その長さを500年、室町時代からとするかどうかはともかくとして、いけばなは長い歴史の波をくぐりぬけ、現在までつづいてきた。

この頃では、あまりみられなくなったが、曾てのいけばなは花道(かどう)であり、その歴史は花道史であった。その花道史が書かれるようになったのは、昭和になってからである。いけばなの歴史は長いが、その研究史はきわめて短く、60年ほどしかないといえよう。

もちろん昭和以前にも、花道の歴史を考え

た人びとはあった。たとえば、すでに室町時代から、いけばなの起りについて、二つの見かたが伝えられている。一つは、花道の最も古い伝書といわれる『仙伝抄』であって、花をたてはじめたのは、「仏在世」の時代からであるとしている。この見かたは、釈迦が生存していた古い時代に始まった花のたてかたが、そのまま今(室町時代)まで続いてきたというのであって、花を瓶にさすことと、花道のあいだに何らかの発展があったことは、考えないものである。もう一つは『仙伝抄』とほぼ同じ時代にあらわれた池坊専応の口伝といわれる『専応口伝』であった。これには花をいけるということを意識した見かたがある。

すなわち、瓶に花をさすことは昔からあったが、それは、ただ美しい花だけをさしたにすぎなかった。ところが自分の先祖の池坊がでて、野山水辺の自然の花をもととして、瓶にさすようになってから、花をいけるという道がひらけてきた。瓶に花をさすことと、花道は根本的に違っている。無意識に瓶に花をさすのではなく、人間の意識的な創造力がなければ、花道とはいえないという。これが『専応口伝』の花道であり、また花にたいする自

覚であった。さらに『専応口伝』には、いけばなの道を自覚しながら、それが自分の先祖から始まったとしているところに、自流の権威をたかめ、また自流の良さを誇示しようという立場がうかがえるのである。

この二つの見かたは、その後も長くつづいた。いけばなの歴史には発展がないということ、いけばな史は自流の権威をたかめるためのものという考えは、江戸時代になっても、いよいよ盛んになった。花道（このことばも歴史的には江戸中期の初見である）の起りを説くにしても、「仏在世」以来の説と、足利義政の頃からとする二つの説が、ひきつづきおこなわれてきた。

流派の始まりについても、平安時代にしたり、東山時代にしたりするものがあったが、流派はもともと江戸中期（宝暦・明和の頃、18世紀半ば）の所産であり、それ以前には池坊しかなかった。なぜこの時期に流派が生れるかについては、別稿にゆずりたいが、諸流派が生れるに及んで、自流の権威をたかめるために、流派の歴史をかえりみるようになってしまったのは、否定できない。

このように前近代（明治以前）の花道史には、各流の流史や伝承はあっても、それが日本人の歴史（とくに生活史や文化史）とともに発展してきたという考えかたは、全くなかったといってもよかった。ようやく明治、大正のいけばな界の動向から、昭和にはいって、いけばなの歴史が花道史として叙述されるようになったのである。幸いにして、いま私たちはその成果を知ることもできるようになった。ここでは、とくにいけばなの成立を中心に、その成果の一端をのぞいてみたい。

## 2. いけばなの成立

ほとんどの花道史には、いけばなの成立は、室町時代であるとしている。したがって、古代から鎌倉時代までは、いけばな以前、の時代であった。むろん花と日本人とのつながり

は、きわめて古く、古代から花を瓶にさすことはあったが、しかし、それはいけばなではない。やはり室町時代でなければ、いけばなにはならないとするのである。では、なぜ室町時代であろうか。

いうまでもなく、それは、この時代になって、座敷飾りが始まったからである。室町時代になって書院造りが完成し、会所（座敷）がつくられるようになった。その理由は別に述べねばなるまいが、ともかく座敷の出現によって、その飾りつけが始まったのである。

たとえば造りつけの押板（のちの床の間）や違い棚、付書院などの飾るものを置く場所が設けられた。またその飾りかたの方式もきめられるようになる。すなわち、押板には2間や1間半などの種類があり、そこにかける軸物が三幅か五幅、あるいは二幅か四幅かによって、そこに置かれる道具も違ってくる。もしも三幅一對や五幅一對が掛けられているならば、その前には三具足（むかって右に燭台、中央に香具、左に花瓶）を飾り、その左右にも一對の花瓶を置く。違い棚には造りつけと移動できるものがあったが、上段には小さい花瓶を、中段には丈の低い平たい花瓶、下段には口の広い花瓶を置くようになった。付書院には、文房具を置くのがふつうであったが、細口の小花瓶を飾ることもあった。

このように花がさしてあるかどうかにかかわらず、座敷を飾るようになってから、花瓶のあるべき場所が定着するようになった。いわば、ここには花瓶がなければならぬという人びとの考えかたが、はじめて生れてきたのであり、これは、いけばなの成立にとっては特筆すべき事実であった。座敷飾りが、いけばなの設立にとって、忘れてはならない前提となる所以である。

いけばなの花は、切られた花である。そして瓶にさされた花である。さらにそれがどこに置かれるかによって、意味をもたされる花である。すなわち押板（床の間）の飾りであ

る三具足として花瓶が置かれたことによって、後世のようないけばなの様式（花型）もつくられてきた。様式の展開については、ここでは触れないことにして、あくまで成立について考えるためには、室町時代以前において、瓶にさす花はどういう姿であったかをみなければなるまい。

### 3. 瓶にさす花

これには二つあった。一つは周知のとおり、そしてしばしば、これがいけばなの起りであるとして語られる供花（くげ）、すなわち仏前にそなえた花である。これは仏教の伝来とともに伝えられたといわれ、ここからいけばなの起源に聖徳太子や小野妹子があらわれてくることになった。

もう一つは、見て楽しむために瓶にさした花である。たとえば『枕草子』の第三段や第二十一段にあらわれる青き瓶にさした5尺ばかりの桜の枝なども、ひとしく瓶にさした花であり、見て楽しむ花であった。では見て楽しむ花と供花の花のどちらが古いかといえ、ふつうは供花かもしれない。しかし、供花はかならずしも瓶にさすとはかぎらず、切った花（花梗）を手を持っている仏像や仏画は、よく見ることができる。たとえば法隆寺金堂の壁画（飛鳥時代）の第1号室にある釈迦浄土図のスケッチである。ここでは観音や勢至が手に散花（さんげ）を持っていて、いずれもインドの風俗とみるべきであろうが、瓶にさす以前の供花をみせてくれるのである。東大寺法華堂の不空罽索観音（天平時代）も、手には蓮の花と茎を持っていた。

瓶にさすとは、花に水をあたえることであり、我も人も見て楽しむためには、水をいれた瓶にささねばならなかった。瓶でなく、平鉢でもよい。何らかの容器に水を満たして花をいれることが、少しでも長く花を楽しむためには必要であった。したがって、仏教伝来より早くから見るための瓶にさす花は始まっ

ていたと考えられ、史料的に確実とはいえないにしても、瓶にさす花の起りは、供花という信仰の花だけではないといえよう。通説にいわれるように、信仰の花（供花）が、いけばなの起りであるならば、瓶にはいれないけれども、直接、土にまっすぐたてて、神の依代（よりしろ）としてきた民俗信仰の花木なども、思いだしてやらねばなるまい。

いけばなの起りとして、いわゆる三つの源流、第一に供花（仏前の花）、第二に瓶にさす楽しみの花、第三に民俗としての花が説かれるのも、そのためである。第三の民俗としての花は、おそらく仏教伝来より古くから始まっており、現在もお相変わらず祭りの花としてつづいている。第一の供花もまた、現代における仏前の花として、けっして珍しいものではない。では、いけばなの起源は、第二の見て楽しむ瓶の花といえるかどうか。それはたしかではない。なぜなら押坂の花瓶が三具足の一つであるように、仏具としての花瓶を否定することはむづかしいからである。

しかし筆者は、いけばなの起りを、供花だけに限ることに、どうしても抵抗を感じてならない。もっと座敷飾り、すなわち室内飾りとしての花にもウエイトをおくべきではないかと思うがいかがか。

### 4. 室内飾りとしての花

供花でない瓶にさす花は、平安時代に大いにすすんだ。貴族たちが、室内の飾りかたに関心をもちはじめてきたからである。室内といっても、寝殿造りのこの時代、廂の下の暮らしかたが基本であったから、今でいう縁がわであろうか。高床の縁や手すりにつづく勾欄の近くなどに花瓶はおかれた。室内での生活がようやく本格化して、自然の草木の美しさを前栽（庭）から屋内にまで延長することが、始まったのである。『枕草子』にみる5尺ばかりの桜の枝を、大きな青磁の瓶にさして勾欄のもとに飾るというのも、長い枝と大

きな花瓶は、なるべく自然の花に近くして、うつろいやすい花の命をできるだけ長く保たせたいという願いのあらわれであった。

室内から屋外にむかって、切った花を鑑賞するためには、花の枝と瓶は、大きくなければならなかった。内から外へむかうことによって、室内へ自然をとり入れようとしたのである。移り変わる四季の自然をとり入れることは、室内での単調な暮らしをかたしか知らなかった貴族の、とくに女たちにとって、大きな楽しみであったに違いない。

平安末期までの瓶にさす花は、供花かどうかに限らず、広く飾りの花として、また見て楽しむ花として、貴族たちの生活に定着していたといえよう。鎌倉時代にはいっても、室内飾りの花の展開がある。たとえば藤原定家の『明月記』の嘉禄元年(1225)の「女院の方、花瓶に色々の花を立てる」とあるのも、室内飾りの花であり、立てた本人だけでなく、他人が見て楽しむような趣味性をもって来たことをあらわしている。こうした前提があったからこそ、瓶の花は、室町時代の座敷飾りのなかに定着するのである。したがって、供花の花ばかりをいけばなの起りとするのは、正しくないといわねばなるまい。

しかし、いっぽうの座敷飾りだけをいけばなの成立の要因として、押板飾りという形式だけをとりあげるのは、いかがであろうか。

いったい座敷飾りの目的は、何であったろう。それは、接客空間である会所(座敷)において、客を饗応するためであった。『迎陽記』によれば、応永6年(1399)、7月7日、足利義満の北山殿には、50人ほどの武家貴族が集まり、おのおの7瓶、あわせて350瓶の花が飾られた。禁裏御所や武家のあいだでこうした七夕会や花会が盛んになるのは、室町時代の大きな特色であった。いけばながもっている“見られるもの”としての運命のきざしがここにはあり、またいけばなが人を集め、その場所を必要とする会場性ともいうべき性

格をもつこと、いわば寄合的な室内芸能であることをうかがわせるのである。

それがまた室町文化の寄合的な特色、あるいは団樂的(だんらん)な性格を示すものでもあったが、いけばなにとっても、鎌倉時代までにはみられなかった新しい歴史的条件であった。もしもいけばなの成立を室町時代とするならば、形式的な座敷飾りの外形だけでなく、鎌倉時代までの瓶にさす花の大きなひろがり、座敷飾りとして定着した花とのつながりを、さらに明らかにしなければなるまい。ことに花を座敷飾りとして定着させた人びとの心の奥にひそむものを、はっきりさせることが大切であろうと思う。'85.2.28

〔付記〕

本稿は、拙稿「いけばなの成立」(『月刊百科』平凡社、'82年4月号所収)と重複する部分があることを、お断りしておきたい。

#### 〈参考文献〉

- 1 和歌森太郎：花と日本人 角川文庫
- 2 西山松之助：花 美への行動と日本文化 NHK ブックス
- 3 塚本洋太郎：花と美術の歴史 河出書房新社
- 4 玉上琢弥編：いけばなの文化史Ⅰ
- 5 林屋辰三郎編：いけばなの文化史Ⅱ (図説いけばな大系2, 3) 角川書店
- 6 大井ミノブ：生活から見たいけばなの歴史
- 7 北条明直：いけばな その歴史とこころ 文化実業社
- 8 吉村貞司：いけばなに生きた人びと 徳間書店
- 9 重森弘淹：現代のいけばな 八坂書房
- 10 いけばな総合大事典 主婦の友社